

「退屈な時間」を過ごしたいと思う人はいないし、「退屈な相手」と人生を共にしたいと思う人はいないだろう。「退屈な授業」にはなるべく出席したくないし、「退屈な人生」など自分は絶対に送りたいくない。退屈という言葉には常にネガティブな印象が付きまとう。しかし本当に退屈には否定的な意味しかないのだろうか。退屈という感覚は、実は我々にとって欠かせない意義を持っているのではないだろうか。

そもそも我々はどのような時に退屈を感じるだろう。一度見て結末を知っている映画をもう一度見せられる時、既知の学習内容を授業で改めて説明される時、大勢が決したスポーツの試合を眺めている時などに我々は退屈を感じる。これらの例から考えれば、退屈は我々の「既にわかっている」という感覚と関わっているようだ。何も得るものがない、成長の余地がない、新しい情報を得られないと感じる時が、我々が退屈を覚える典型的ケースだと考えられる。

一方で我々はまた「何一つわからない」と感じる時にも退屈を感じる。外国の映画を字幕や吹替なしで見る時、専門用語を早口でまくしたてる授業に出席した時、圧倒的大差をつけられた試合の後半など、自分の力ではどうにもならないという無力感を抱く時にも、我々の熱量や意欲は一気に失われ、つまらないという気持ちが生じる。

こうして考えてみると、退屈という感覚は成長への意欲と密接に関わっているように見える。我々は自分が成長することを求める。だからこそある体験が自分の成長の契機だと感じた時にはその経験を隅々まで味わおうという意欲や熱意が生じる。逆にその経験が自身を全く成長させないと感じた時、自分にとって容易過ぎる仕事や手に負えない相手と向き合わねばならない時に、早くその時間を終わらせたいと願うのだ。つまり退屈という感覚は成長したいという意欲があることの証左であり、またそもそも我々が退屈という感覚を持っていなければ、自身の成長にとって有意な時間と無意味な時間の区別すらつかなくなってしまふと考えられる。

もちろん退屈と感じる局面は他にも様々にあり、ここで述べたことが限定的なものに留まることは事実である。しかし少なくとも退屈という感覚に積極的意義もあるということだけは認められるのではないか。